

労働の変質について

労働者委員 森田周一

超少子高齢化に伴う生産労働人口の減少が、将来にわたる日本社会の最大の懸念材料とされている。

GDP の減少をはじめ年金・医療などの制度存続も危ぶまれる。

労働力不足に対して女性・高齢者・移民の活用などが検討され既に政策に反映されているものもある。

育児・介護など解決すべき課題も多くはらむが、出生率の回復と共に喫緊に実現しなければならない。

そうした中、野村総研はオックスフォード大学のオズボーン准教授らに依頼し国内 601 種類の職業を人工知能やロボット等で代替される確率を試算した。

結果、10～20 年後には現在の労働人口の 49%が代替可能とされた。

製造業をはじめとして、営業、小売り、自動車運転者、行政事務員、銀行員、郵便局員など雇用労働者のほとんどが含まれている。

芸術・文化などや人のスキルによるものや五感に訴えるもののみが代替できないと分析された。

額に汗して生産に従事する労働の概念に、時代と共にいろいろなサービスが加わってきた。

しかし、音楽家やスポーツ選手など飛びぬけた能力の持ち主が職業として存在していても一般的な労働というイメージが湧かない。

荘園で領民からあがりを取り、和歌や蹴鞠で一日を費やした平安貴族のイメージか。

子供のころ一生遊んで暮らしたいと思っていた。

また、科学が発展したら機械やロボットが労働を荷ってくれると想像したこともある。

人生 100 年になろうとする時代、何をして日々を費やすのか。

文化的センスのかけらも感じられない我が身を思うとそれだけで気が重たい。

初夢にはやや遅いが新年に思ったこと